紙の中の殺人

川村 湊

紙の中の殺人

川村 湊

河出書房新社

川村湊（かわむら　みなと）
一九五一年北海道生れ。法政大学卒。文芸評論家。著書に『異様の領域』（国文社）、『〈酔いどれ船〉の青春』（講談社）、『アジアという鏡』（思潮社）他がある。

紙の中の殺人

一九八九年六月二〇日　初版印刷
一九八九年六月三〇日　初版発行

著　者　川村　湊
発行者　清水　勝
発行所　株式会社　河出書房新社
東京都渋谷区千駄ヶ谷二-三二-二
電話　四〇四-一二〇一（営業）
　　四〇四-八六一一（編集）
振替口座（東京）〇-一〇八〇二

印　刷　三松堂印刷株式会社
製　本　加藤製本株式会社

©1989 Printed in Japan
定価はカバー・帯に表示してあります
落丁本・乱丁本はお取替えいたします
ISBN4-309-00572-1

紙の中の殺人・目次

Ⅰ 紙の中の殺人

漂流する密室――中井英夫『虚無への供物』 9
監視人のいない檻――竹本健治『匣の中の失楽』笠井潔『バイバイ、エンジェル』 38
探偵の恋――江戸川乱歩・三島由紀夫『黒蜥蜴』 67

Ⅱ 「外側」にいる少年

少年と物ノ怪の世界――稲垣足穂論 79
「外側」にいる少年――橘外男論 93
〈鈴木主水〉の語り手たち――久生十蘭論 110
闇の中の「虚」と「実」――山田風太郎『八犬伝』論 129

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

Ⅲ 少女の系譜

妹の恋――大正・昭和の〝少女〟文学　151
月の暦――〝少女病〟の系譜　172

あとがき

初出一覧

紙の中の殺人

Artdirection & Artwork ; HIROMITSU YOSHIYA (FINE ART)
Design ; TAKASHI MIYAGAWA

I

紙の中の殺人

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.co

漂流する密室

――中井英夫『虚無への供物』

1

『虚無への供物』を最初に読んだのは、いつだったろうか。三一書房（だったと思う）の作品集の中に「塔晶夫『虚無への供物』」というのがあって、それを北海道の片田舎の市立図書館から借り出して読んだような記憶がある。生意気な高校生の御多分にもれず、日本の〝探偵小説〟を小馬鹿にしているようなところのあった私だったが、この寝転がって読むには、やや手首の疲れる、持ち重りのする本を読んで、本当のところ何が何だかよくわからなかった。エピグラフの詩もキザったらしく思えたし、内容もえらく錯綜していてストーリーを追うことさえ、かなり骨の折れることだ

った。しかし、読みおわったあとに、〈虚無〉という概念が、伸びたりも縮んだりもする奇妙な世界空間をも意味するのだ、とおぼろげに感じたことをおぼえている（そして大学時代に再読したとき、私は文字通りこの作品に〝熱狂〟した）。

兄弟が多かったので一人きりの部屋があるわけはなく、電気スタンドを持ちこんだ押し入れ部屋の中で、乱歩の『屋根裏の散歩者』や『人間椅子』、『パノラマ島奇談』といった〝自閉症〟初期ともいえる小説類を耽読していたわが思春期は、いま思いかえしてみてもおぞましく、潤いに欠けるものだった。そして、そうした変格もの探偵小説の、押し入れの隙間からのぞき込むような〈世界〉の光景は、猟奇的で官能的であった。ただ、北海道の田舎の高校生だった私にとっては、それらの小説の主な舞台である「東京」は、「巴里」や「倫敦」とも等しく遠い〝異空間〟のようなものであって、そうした異空間の中にもまた稠密な密度を持った自閉的な空間のあることが異様に思えたのだ。『ドグラ・マグラ』や『黒死館殺人事件』あるいは『死霊』といった小説はその後に読んだものだが、初め、その〈閉ざされた世界〉に容易に入りこみにくい抵抗感を感じた覚えがある。いってみれば〝閉ざされた空間〟など、乱歩や荷風などを読んだあの思春期以来、もうまっぴらという気持が反動的にあったのだろう。

塔晶夫の『虚無への供物』を久しぶりに読み返してみたのだが、まず私が読んだこの「本」のこ

とについてちょっと書いておきたい。私がいま手にしているのは「昭和39年2月29日／第1刷発行」と奥付にある講談社版のいわゆる初版本で、私はこの本を私が住んでいた韓国・釜山市の宝水洞（ボスドン）にある古本屋で見つけ、手に入れたのである。カバーもとれ、表紙と見返しのつなぎ目をセロテープで補強しているこの本が、愛書家の所蔵になったものとは考えられず、おそらく数人もの手を経たものであることはそのシミのつき方、手ずれの度合いで容易に想像がつく。一番考えやすいのは、おそらく船乗りたちのための船内の備蔵図書であって、そんな船員たちの一人が入港、上陸のさいに売りとばしたということだ。時間だけはたっぷりと積みこまれている航海のつれづれに、このいかにもオールド・ファッションな題名の「探偵小説」を手にしたいく人かの船乗りがあったことは想定しやすいだろう。だが、この小説を読んだ海の男がいったいどんな感想を持ったものか、ちょっと見当がつかない。ただひとつ、〝洞爺丸事件〟という海難事件を作品成立の大きな動機（モチーフ）としているこの小説が、玄海灘という海峡を渡りつつある船人に、あまりいい印象を与えなかっただろうということだけは、だいたい推測がつく。日本に最も近い外国の港町でその本が売りとばされた、というのもそのためだろうと考えてみることは、たぶんそれほど的がはずれていないと思えるのである。

さて、数奇な運命を経てきたらしいこの『虚無への供物』（〝数奇〟というほどではなくても、少なくとも海を越えてきたことだけは確かだ）を二度目に読み返してみて、自分がストーリーの細かなところをどんどん忘れてしまうたちで、すでに一度通読したはずのこの探偵小説の〝犯人〟も

〝トリック〟も〝動機〟もことごとく忘れていることを改めて発見した。おかげでまったく初読のときと同じように固唾を飲んで読むことができたのだが、最後にこの小説にちょっと〝裏切られた〟という感じが残ったことは、初めて読んだ時に感じたものと同じであった。裏切られたというと穏やかならぬ感じに聞こえるかもしれないが、鮮やかにドンデン返しのうっちゃりを喰らわされたとか、ふっと肩すかしを喰ったという感覚ともちょっと違って、留守だと思いつつも訪ねた人が、そこに居てしまった時のような裏切られ方なのである。

むろん、作者はあらかじめこのことを勘定にいれていたらしく、たとえば登場人物の一人にこんなことを言わせている。「そんなの、嫌だな。……謎ときの本格物だと思って、ストーブの傍や木陰のハンモックでのんびりページを繰っていると、いきなり犯人は読者のあなただなんて、悪趣味だな」。

つまり、それは通常の推理的結論の反転につぐ反転というルールを守ったドンデン返しではなく、どこかルール破りの、虚構と現実とのしきい目の垂れ幕をパッと切り落としてしまうような逆転の仕方であって、それが作品の中の殺人事件の動機だけではなく、この作品そのものの動機（モチーフ）をも〈奇抜〉なものとしているゆえんなのである。

『虚無への供物』の中に書かれた〝氷沼家（ザ・ヒヌマ）連続（不連続？）殺人事件（マーダーケース）〟――それは一九五四年十二月から一九五五年四月（七月）にかけての約五か月間にわたって狂言廻し役のアリョーシャこと亜

利夫、女探偵気取り（いつも失敗する似而非探偵役）の久生、本当の探偵役の牟礼田俊夫、および氷沼蒼司、藍司といった若者たちの見た錯綜した〝夢〟が織り出した非現実の事件なのであり、それはまさに初版本の「あとがき」で述べられているように「反地球での反人間のための物語」というにふさわしい虚構性、非現実性に彩られているのである。

すなわち、それは徹底的に非現実的（反宇宙的）で虚構的（フィクショナル）な〝拵えもの〟の小説であって、いわゆる日本近代文学風の自然主義といったリアリズム小説や私小説とは縁もゆかりもない文学作品といえるのだ。マニエリスム、衒学趣味、オカルティズム、神秘主義、高踏的な倒錯趣味といったものが、全篇のいたるところにちりばめられ、螺鈿の模様のようにきらきら輝いているこの作品は、そういう意味でいえば日本近代文学史のうえでも独歩、孤高の地位を占めるものであり、竹本健治の『匣（はこ）の中の失楽』が登場するまでは〝空前絶後〟と評してもよい作品だったのである（むろん、〝空前〟を称するためにも『黒死館』や『ドグラ・マグラ』の存在には目をつぶっておかなければならないが）。

しかし、『虚無への供物』が持つ最も鮮やかな特徴は、逆説的な言い方となってしまうが、〝非現実〟の物語でありながら、それが〝現実〟とぴったり密着しながら物語られているということにあるといわざるをえないだろう。それは奇怪なシャム双生児のような非現実と現実との癒着なのであり、歴史的現実空間と虚構空間が、陳腐な比喩を使えば「メビウスの輪」あるいは「クラインの壺」のようにどこかで密通しあっているのである。

正確には一九五四年十二月十日、東京下谷・竜泉寺で始まったこの探偵小説のストーリーは、現実的な歴史的時間を刻みながら（時おり、当時の事件相、社会相がコラージュされる）、実在の地名のうえをたどったうえ、一九五五年七月十二日、下落合で幕が閉ざされるのだ。これは物語の基本的な性格である〝時〟と〝場所〟の虚構化、曖昧化という文法に背馳していることはいうまでもない（――「昔々、あるところに」「いずれの御時にか」「一九××年、F県A町で」といったような）。潔癖な小説家が自分の作品の中に、その当時を思い起こさせるような具体的な映画俳優の名前や事件や金額（物価）を出さないように努めているといった文章道を実行していることは珍しくないことだろう（たとえば三島由紀夫のように）。

それは小説家としての生活的現実と小説の内部とのしきい目をあっさりと踏み破って、日常茶飯事めいたこと、垂れ流しの感想めいたものをえんえんと書き続ける私小説および私小説擬いの文学作品への嫌悪に裏打ちされている。そういう意味では、本格的な〝変格もの探偵小説〟の、正統的な〝異端文学〟の嫡流を意図したと思われる小説作品の中に、具体的な年号、日付、地名や新聞記事の話題（さすがそれらの当時の事件はほとんど忘れ去られ、風化しきっているように見える）を書きつけるたびに、作者はひりひりとした審美的な痛みを、マゾヒズム的に味わっていたのではないかと思われるのである。もちろん、これは倒錯的な快楽にほかならない。そして、この『虚無への供物』はまさにそうした〝倒錯性〟のよって来る由来を問うことによって、時代精神そのものと切りむすびあうスリリングな緊張を持続させていると思われるのである。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com